

「内面」から「身体」へ

明星大学 宮川 健郎

児童文学の変化をとらえて、「身体」そのものから物語が発生している」としたのは、児童文学評論家の西山利佳だった。二〇〇〇年の発言である。あさのあつこ『バッテリー』（全六巻）の一卷めが刊行されたのが一九九六年、森絵都『DIVE!!』（全四巻）が刊行されはじめたのが二〇〇〇年。西山は、野球や高飛び込みに熱中していく男子中学生を描いた、これらの作品をさして、そういったのだ。それなら、それ以前、物語はどこから生まれていたのか。「身体」に對比して言えば、「内面」である。七〇年代後半以降、児童文学は、それまで子ども読者から遠ざけられていた、性や死、家庭崩壊といった主題を積極的に書くようになる。児童文学が、現実のなかで生きる子どものがたを掘り下げて描こうとした結果、それらは書かざるをえないものになっていった。しかし、この傾向は、「児童文学はいつまでも（中略）登場人物の非常

にナイーブな心理の問題にこだわり続けている、この十年間かえって停滞している。」と批判される。これは、九四年の石井直人の発言だ。そうした主題は、少年少女の一人称の語りによって、彼らの内面をとおして語られることが多かったのである。（たとえば、泉啓子『風の音を聞かせてよ』八五年など）
 昨年刊の佐藤多佳子『一瞬の風になれ』全三巻は、陸上競技に打ち込んでいく高校生を書いた。本の体裁も内容もYA（ヤングアダ



『一瞬の風になれ』1・2・3
 佐藤多佳子／講談社／2006年



『走る少女』
 佐野久子=作／杉田比呂美=絵
 岩崎書店／2007年

ト）だが、佐藤は、児童文学出身の作家。新二は、のちにはプロチームに入ることになる兄にアコがれてサッカーをつづけてきたけれど、ちっとも上達しない。高校では、サッカーと兄をのがれるようにして陸上部に入る。兄との葛藤など「内面」が書かれないわけではないが、全三巻がひたすら描きつづけるのは「身体」の物語だ。新二は、トレーニングをかさねて、速く速くなっていく。
 佐野久子の新作『走る少女』は、中学の陸上部が舞台だ。比呂も季里子も走るが、彼女たちは、それぞれ兄と父という挫折したアスリートの影を背負っていて、その分だけ「内面」の物語にとどまっている。彼女たちが走り抜けるべきなのは、この八〇年代的な物語世界そのものなのかもしれない。
 みやかわ たけお 日本児童文学専攻。著書に『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会）など。